図書館Café 第5号 Vol.5 No.1

発行 / 神奈川工科大学附属図書館 2015.12.1

本の読み方いろいろ ―アクティブリーディングのすすめ

副学長／情報ネットワーク・コミュニケーション学科教授
上平 員丈

幼いころから運動好きで、外で遊ぶことが多かった私にとって読書は興味の対象外であり、高校に入るころまで授業以外で本を読んだ記憶は皆無といっていいほどない。ところが、どういうわけか高校１年のとき、きっかけはよく覚えていないが、たまたま読んだ SF 小説がすごく面白く、偶然にも読書の楽しさを知ってしまった。これがきっかけとなってそれ以来、ありとあらゆるジャンルの本を読み、読書は私の人生の一部になり、私の人生に大きな影響を与えることとなった。

若い時に友人の読書スタイルを見て、本の読み方もいろいろあるものだと思った。まず、同じ本を何度も繰り返し読むという方法。社会人になって間もないころ、三国志を読んだ。全８巻、合計で 3000 頁を超える大変長い小説であるが、面白いので最後まで一気に読んだ。それでも１か月近くかかった。その話を、ある友人にしたら、彼は「僕も三国志が大好きで、これまでに８回読んだ。ほとんど頭に入っている」といわれビックリした。

読みながら本に書き込みをしないと本を読んだ気にならないという友人もいた。感じたことなどをその頁のなかに書き留めるらしい。彼が読んだ本を見せてもらうと、ぎっしり書き込みがしてあり、どのページも真黒である。自分も真似てみた。いろいろ考えながら本を読むことになるので、読み終えたときに読書の深みが違うと感じた。このほか、本は声に出して読むようにしているという人もいた。

以上の共通点は本とアクティブに関わることである。普通に本を読むより、より深く本と関わることができる。私はこれらの読書法を「アクティブリーディング」と自分で勝手に名づけて、時々であるが実践している。読書の目的、楽しみ方は様々である。こうでなければいけないということはない。楽しめることが第一である。しかし、たまには、いつもと違った読み方にも挑戦してもらいたい。読書の楽しみ方が広がるとともに本の深みがより一層感じられるはずだ。

芳年
『月百姿　南屏山月　曹操』

学生時代のこの一冊

中島敦（なかじまあつし）『李陵』

基礎・教養教育センター准教授　三浦 直子

高校時代、初めてこの本を手に取るも、漢字の多い独特な文体に、数行読んで挫折する。大学時代、背伸びをしたくて、最後まで読み通すことだけを目標に再挑戦。孤軍奮闘する李陵（りりょう）の心理や戦闘シーンに圧倒される。院生時代、論文執筆に悩みながら再読し、宿命と格闘する司馬遷（しばせん）の覚悟に胸を打たれる。大学教員となった今、改めて読み返しながら、登場人物たちの哀しみに透ける作者・中島敦に想いを馳せる。

すぐには理解できなくても、自分の変化とともに読書から得られるものも変化する。次にまた読み直すとき、私は何を発見するだろう。――皆さんに、再挑戦したい本はありますか？

中島敦『李陵；山月記；弟子；名人伝』
株式会社KADOKAWA
図書館１階文庫書架に所蔵
（請求記号　B913||N）

中島敦（1909-1942）：東京帝国大学卒。横浜高等女学校に勤務しながら英文学、中国古典を研究、それらに取材した小説を多く発表。
【ジャパンナレッジ（図書館データベース）『日本国語大辞典』より】

留学体験記

一歩は簡単な理由から

応用化学科３年　田中 美妃

日本という国から出てみたい。今しかできないことをしたい。海外化学研修に行こうと思ったのはこんな簡単な理由だった。英語が全くダメなくせに、「なんとかなるだろう」という軽い気持ちで 2015 年の春休み、4 週間シアトルへ渡った。

午前は英語の授業。午後は毎日ダウンタウンや観光地に出かけ、休日はホストファミリーと教会へ行ったり BBQ をしたりショッピングをしたりして、文化や食、人、言葉に触れた。

初めて生の英語に接した時、まず聞きとれず、質問に苦笑いで黙るしかなかった。耳が慣れてくると単語で返せるようになり、文法など気にせず、冗談に笑い合った。言葉の壁を高く感じていた私にとって「楽しい」と思えるのは意外なことだった。正直なところ、私ははじめ「外国人は怖い」と思っていたのだ。しかし、ホストファミリーも街の人々も皆いい人たちだった。自分の中に偏見があったことを痛感した。

色とりどりのお菓子

チフーリ・ガーデン&ガラス館

パーティーでホストファミリーと

教会では人々が聖書を読み、歌を歌い、神を崇めていた。宗教を持たない私は、仏教以外の宗教に関わるのは初めてで、人はこんなに何かを信じることができるのかと不思議に思ったと同時に、圧倒された。

私はたくさんのことを学んだ。広い空、おいしくない米、讃美歌、カラフルなお菓子、クセのある英語。自分がいかに偏見を持ち、狭い世界の中で生きてきたか。実際に行って、見て、聞いて、触れないと、分からないことがたくさんあるのだと知った。「なんとかなるだろう」という軽い気持ちは、私の世界を大きく変えた。

学生のおすすめ本

西部直樹（にしべなおき）『誰でもできるディベート入門講座』

電気電子情報工学科卒研生　中田 悠太

西部直樹『誰でもできるディベート入門講座：ビジネス・コミュニケーションを活性化させる技術』ぱる出版
図書館２階書架に所蔵
（請求記号　809.6||N）

ディベートという言葉を知っていますか。“何か討論をする”という漠然としたイメージを持つ方も多いのではないでしょうか。一般的には議論する、討論するという意味の言葉ですが、ここでは議論技術の訓練として行われているゲームのことを指します。

私がゼミのカリキュラムで実際のディベートに臨んだ際には、自分の考えを論理的に伝えることが出来ず、院生の意見に圧倒されて頷くばかりでした。そんな状況を打開したくて図書館で出会ったのがこの本でした。各ページに図解があり具体例を交えた説明が添えられて、内容をビジュアル的に見て取れる構成になっています。読み進めるにつれて、ディベートが主張や根拠、理由などの構成要素から成り立っていることが理解できました。

それが分かると実際のゼミでも、ただ頷くだけから反論のきっかけをつかめるようになりました。そうなると言葉のキャッチボールが生まれ、緊張感のある熱く楽しい議論になってきます。本の後半には議論を発展させる方法やテクニックが書かれていて、まだまだ全てを自分のものには出来てはいませんが、いろいろと応用してみようと思います。

とにかく分かりやすい本なので、学生のうちから“議論技術”を身につけたい人にぜひおすすめの一冊です。

図書館 Café　Vol.5 No.1　　発行日：2015 年 12 月 1 日
発行所：神奈川工科大学附属図書館　　館長：小川 喜道　　印刷：神奈川工科大学印刷室
編集委員長：本田 数博　　編集委員：田中 理恵子・安本 匡佑・須賀 弘道・渡邉 怜・中嶋 爾志

学問の街 ケンブリッジとオックスフォードを旅して

応用バイオ科学科助教　田中 理恵子

2012 年 6 月、当時博士課程の大学院生だった私は、国際学会に参加するためにイギリスへ渡りました。学会初日の会場はケンブリッジ大学。世界大学ランキングで上位に名を連ねる学問の最高峰です。冷や汗をかきながら拙い英語で初日の発表を終えた後、私は友人達と共に「The Eagle」というお店を訪れました。1667 年創業の The Eagle はケンブリッジで最も古いパブ（居酒屋）で、DNA の二重らせん構造を発見したワトソンとクリックが通っていた事で有名です。今

The Eagle（ケンブリッジのパブ）

では観光客が多く訪れる場所ですが、当時は学生や研究者達のたまり場だったのでしょうか。店員の一人が、ワトソンとクリックが良く座っていたという席を教えてくれました。友人達はその席に座ると、感無量といった表情を浮かべていました。遺伝学のブレイクスルーとなった 2 人の「閃き」に想いを馳せながら、美味しいエールビールを頂く時間はなんとも贅沢です。

旅のスケジュールはとてもタイトで、翌日にはバスで3時間かけてオックスフォード大学へ。オックスフォードには数多くの伝統的なカレッジが点在しており、建物の統一感から街そのものが大きなキャンパ

オックスフォードの町並

スのように感じます。シンポジウムに参加した後は、オックスフォード大学の構成カレッジの一つであるベリオール･カレッジで夕食をとりました。カレッジ内の食堂はまさにハリーポッターの世界！　オックスフォード大学はハリーポッターのロケ地としても有名です。映画の舞台の中で、学生達が生き生きと難しい話をしながら食事をする。彼等にとっては日常なのでしょうが、私にとってその光景はフィクションとノンフィクションが融合しているようにも見えました。

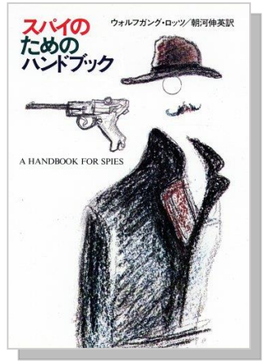
オックスフォード大学の食堂

ケンブリッジやオックスフォードには、そこにいるだけで胸が高鳴るような「アカデミックな雰囲気」が漂っています。図書館を覗いてみると、夢中で文献を読みあさる学生や、鉛筆をかじりながら必死に勉強する学生が目に入ります（当然、ゲーム機やスマホを手にしている学生などいません）。この街全体を包む「アカデミックな雰囲気」が、学生達の好奇心や探究心をかき立てているのでしょう。学ぶ環境の大切さを改めて実感した旅でした。

先生おすすめの一冊

ウォルフガング・ロッツ『スパイのためのハンドブック』

電気電子情報工学科教授　小室 貴紀



ウォルフガング・ロッツ
『スパイのためのハンドブック』
ハヤカワ文庫
図書館 1 階文庫書架に所蔵
（請求記号　B391||L）

ウォルフガング・ロッツ：1921 年、ドイツに生まれる。ナチス台頭のため、パレスチナに移住する。16 歳で騎馬警官隊に入隊した後、イギリス軍に編入。　【本書著者紹介より】

筆者のロッツ氏は、イスラエルの秘密諜報部のトップエージェントとして活動した本物のスパイ。本書はその経験をもとに「一流のスパイになるための手引書」として執筆された。

経験者が書いているのだから、実用的に違いない。しかし残念ながら、私はスパイであったことも、今後スパイになる予定も無いので、本当に役に立つかどうかを自分で検証することは出来ない。学生諸君がスパイになった暁には、本書の内容が正しかったかどうか、是非教えてほしい。

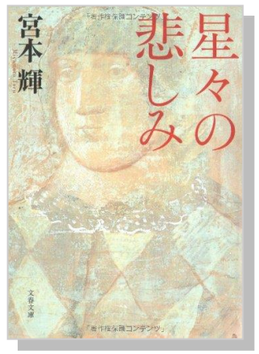
一方、スパイにならない人も、自分がスパイになった姿を想像しながら読んでみるのも一興だ。上品なユーモアにあふれる語り口のため、思わず引き込まれるほど面白いからね。

そもそも、書籍とは紙に付いたインクの染みの集合体であり、それを見て「面白い」と感じること自体が不思議なことではないだろうか？　この不思議な経験は、教育を受けなければ手に入れることが出来ない。でも学生諸君は文字も読めるし、想像力もあるだろう？

文字を読むことだけが読書ではない。そこに書かれている情景を想像できることに価値がある。たまには、全く役に立たない本を読んでみるのはどうだろう？　この本は、全体が一つの冗談なのだから。

宮本輝（みやもとてる）『星々の悲しみ』

看護学科助教　松浦 彰護



宮本輝『星々の悲しみ』文藝春秋
図書館 1 階文庫書架に所蔵
（請求記号　B913||M）

宮本輝（1947-）：小説家。兵庫県に生まれる。『泥の河』で第 13 回太宰治賞を受け認められた。同年『螢川』で芥川賞を受賞し、清新な作風が注目された。またエッセイ集として『二十歳の火影』などがあって、エッセイストとしても名声がある。
【ジャパンナレッジ（図書館データベース）『日本大百科全書』より】

医療の前線にいた私にとっての若者像は、初めて臨床に立つ看護師でした。彼らはこれから様々に臨床を体験していくのですが、その体験はきっとそれぞれに新鮮であることでしょう。しかし、場面や状況などに世代的な違いはあれ、“若者”だった頃の私の体験と今の私の体験でさえ、その新鮮さ以外においては、本質的な部分に違いはないのかもしれません。新鮮な体験を積み重ね経験とすることは、実践の科学である看護において、とても意味のあることと考えています。

本書は、どこにでもいるような若者達が主人公の、それぞれの群像を描いたささやかな物語の短編集です。彼らは受験に失敗したり病気になったり仕事がうまくいかなかったりと、自分の本意ではない人生の途中にいます。若者である彼らにはきっと新鮮であろう生と死、人生そのものの残酷さ、悲しみ、美しさの体験が、若者特有の熱気と闇と切なさを以って生き生きと描かれています。人生に対するじりじりとした不安や焦り、他者の心情を未熟にも敏感に察しようとする試みの描写は、私自身が現実に体験した記憶のように胸が締め付けられます。作者と私の世代もまた随分違いますが、若者の体験は世代が違っても、星々の煌（きら）めきはどれも刹那（せつな）であるように、本質的な変わりはきっとないのでしょう。

本書は国語の授業や入試問題などに多く使われているようで、目にした方もいるかもしれません。“若者”の時に本書に出会えていれば、私は何を考えたのでしょうね。お勧めの一冊です。